
ご主人様と猫。

鍵屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ご主人様と猫。

【Nコード】

N5269S

【作者名】

鍵屋

【あらすじ】

この度アタシは、諸事情から俺様で変態なご主人様の飼いネコになりました。ひっじょおに、不本意ですが。

1、お持ち帰りされました。

「若様、それは？」

寢床を求めてふらついていたところを捕獲され、誘拐よろしく連行された先は豪邸でした。

そして出迎えたのは、一ミリの隙もなくきっちりとスーツを着込んだ銀縁眼鏡のどこか冷たい雰囲気のおにーさん。

「拾ったんだ。飼うつもりだからそのつもりで」

そのおにーさんに？若様？と呼ばれた、えっと、ご……ご主人様は、平然と言い切ってアタシを抱き上げたままその脇を通り抜けた。

「若様、ご冗談が過ぎます！」

「冗談じゃないよ、乾^{いぬい}。」

みーは俺のペット、この俺に爪を立てる生意気なネコだ。それ以上でもそれ以下でもない。お前が心配するようなことじゃない「ですが！」

おにーさんは納得がいかない様子で怒鳴り、アタシを持っているとは思えない身軽さで歩くご……だああっ、もう！ この人、を追いかける。

そのお怒りはごもつともだとアタシも思うですよ。アタシとしましても、この人に捕獲されたのはひっじょおに不本意なのですから。逃げようにも、しっかと抱き上げられたのでは抵抗らしい抵抗も出来ないのです。

捕まる前にはちゃんと、爪を立て、歯を剥いて抵抗したのです！

ですがその甲斐なくあっさりと捕獲。

大人しく飼われたなら三食寝床付き、という甘言に惑わされた訳じゃないはずです。

ええ、アタシにもプライドというものがあるのです！

世間の荒波にもまれて、爪の垢ほどに削れてしまいましたけども。

ともかくっ！

コレにはふかぁーいふかぁーい、恐ろしく深い事情があるのです

！

2、家を失いました。

（前書き）

住宅火災の描写があります。生々しい描写ではありませんが、ご注意ください。

2、家を失いました。

それは今日の昼間のことです。

アタシが住処であるアパートに向かって歩いてみると、サイレンと鐘を鳴らしながら走っていく消防車に追い抜かれたのです。

火事なのでしょうか、不用心ですね。

この時のアタシはそんなことをちらりと考えただけで、思い切り他人事。

だって仕方がないのです。

この時のアタシの頭の中は明日からの予定でいっぱい、実を言えば少々寝不足気味。昨日からときどきわくわくで、あまりよく寝れなかったのです。

アパートに近付くにつれて、その浮ついた心に何やら暗雲が漂い始めたのです。

何かが燃えた焦げた臭いに、道路に出て不安そうに言葉を交わす奥さま方。

それらはアタシの住むアパートに近付くにつれて、どんどん強く多くなって行きました。

いやあな予感がしたですよ。

「お嬢ちゃん、この先のアパートで火事があってね。悪いけど通行止めなんだよ」

アパートまであと少し。

というか、アパートの目の前というところで、消防団という文字の入ったヘルメットをしたおじさんに止められました。

アパートで火事。

その言葉でアタシの顔は血の気が引いて真っ青なっていることでしょう。

この先にあるアパートといえば、アタシが暮らすぼろアパートだけ。そこにはアタシの全財産があるのです。

幸いにも、携帯電話とお財布は鞆の中にあります。でもそれだけしかないとも言えるのです。

「もしかしてお嬢ちゃん、あのアパートの住人かい？」

力なく頷くと、おじさんは通してくれました。

ほぼ鎮火したけどまだ煙が出ているから気をつけていくんだよと、そう言ってくれた消防団のおじさんにお礼を言っアパートに近付きます。

……ああ、やっぱりアタシの住むアパートです。
どの程度の火事なのでしょう。火元はどこなのでしょう。

逸る気持ちを抑えながら、取り出したハンカチで口を鼻を押さえ進みます。

「あんだ、なんて事してくれたんだいっ！」

待ち構えていたのでしょう。

アパートの前で警察と消防の方と話していた鬼ババ……もとい、大家さんがアタシを見つけるなりそう声高に怒鳴りました。

「いつかはやると思ってんだよ！」

この鬼ババ……もとい、いえ、もう訂正するもの面倒です。仕事の都合で保護者が殆ど家に帰ってこないせいなのか、アタシを目の仇にしているのです。

品行方正を絵に描いたようなアタシだというのに、ご近所の奥さま方にはすこぶる評判なアタシを、とにかく追い出す口実が欲しいのです。

曰く、保護者がいないのをいいことに男を連れ込んでいる。

曰く、夜遅くまで帰ってこないのは援助交際をしているからだ。

曰く、曰く、曰く……。

とまあ、こんな具合に。

もちろん男の人が苦手で目もまともに見れない彼氏なし歴年齢なアタシにそんなことは無理ですし、遅くまでアパートに帰らないのはこの鬼ババと顔をあわせたくないのと節約のために図書館で勉強してるからで。

近所の奥さま方は少なくともアタシがそんな子でないことはわかってくださってるようで、表面的には優しく接してくださってます。

「ちょっと落ち着いてください。

火元がその子の部屋だというだけで、原因もなにもわかってないんですから」

鼻息荒く怒鳴り散らす大家さんを警察の方が宥めながら、アタシから引き離します。

同情するような憐れむような、そんな視線がアタシに向けられますが、その奥には疑うような色が見えました。

アタシはこういうのに敏いのですよ。

「あー、落ち着いて聞いてくれるかな。

火元は君の部屋で、台所周りというか玄関近くの燃え方が酷いからその辺りが火元じゃないかと思う。詳しいことは完全に鎮火を確認してからになるけど」

玄関ですか。燃えそうなものをおいた記憶はないのですが？
ですが消防の方がそういうなら、そうなのでしょう。

「発見が早かったから居室の方は燃えてないけど、煙と消化の水で酷い状態になってる。玄関扉が熱で変形もしてるし、とても住める状態じゃない。

それから現場検証を終えるまでは物を動かさないでもらいたいだ」

それってつまり、

「申し訳ないんだけどね」

そおゆうことなのですな。

神様、これは浮ついていたアタシへの罰なのですか！？

久しぶりに叔母さんに会えるので、ちょっとうきうきわくわくしてただけじゃないですか！

「それって、いつまでかかるんですか」

なんとか絞り出した質問に返ってきたのは、早くても明日の昼過ぎだという答えだったのです。

2、家を失いました。

（後書き）

住宅火災についての対応は、よくわからないので想像で書いてあります。

消防や警察関係の方で「違う!」という方は……目をつぶっていた
だくか、情報提供をお願いします。

3、野良になりました。

ふらふらと、アタシは歩いた道を逆にあるいていたのです。
家に帰る時は軽い足取りだったというのに。

この差はなんなのでしょう。

……いえ、わかってるのです。
火事と鬼ババのせいなのです。

鞆から取り出した携帯電話をぐっと握り、叔母さんからの連絡を待つのです。

アタシの保護者である叔母さんは、世界を飛び回る謎のスーパー
ウーマンなのです。

……聞いた仕事内容がアタシにはさっぱりただただで、横文字
が社名などこかの国に本社を置く会社のOLさんなのですが。

とにかく、その叔母さんがアタシの夏休みの始まりと同時期に長期
休暇をもぎ取ってくださりまして、一緒に旅行に行こうかという
ことになっていたのです。

今日の夕方にアタシを叔母さんが迎えに来て、空港近くのホテル
で一泊。そして遙か南の国に飛び立つ予定だったのです！

うーうーうー。

いくらでも涙が出せそうな気がします。そこは必死に我慢です。
女には泣いても良い時と悪い時があるのだと、叔母さんがアルコ
ールが入ると熱心に語ってくれるのです。

女の涙は武器なのだ。

それを男がいない場所で流すなんて、無駄だと。

アタシが我慢してるのはソレが理由じゃありませんよ、念のため。

携帯を開き時間を確認すると、そろそろ叔母さんの乗る飛行機が日本につく時間です。

ついたら一番に連絡をくれると、この間の電話で言っていました。

そわそわと、電話を待ちます。

胡散臭さ満載なのは、気付かないことにしましょう。それがアタシのためです。

じ、じりりりり。じりりりり。

昔懐かし黒電話の音で携帯が鳴って、慌てて電話を開きます。ディスプレイに表示されるのは叔母さんの名前。

嗚呼、天にも舞い上げれる嬉しさですよ。

「お」

『急な仕事が入っちゃった』

窮状を涙ながらに訴え、迎えに来てと告げる前に……叔母さんは今にも泣きそうな鬱々とした声音でアタシの言葉を遮ったのです。

『これから愛しい姪と久しぶりのバカンスだって言うのに、アタシじゃないと無理だとかあの無能上司が言いやがるの。絶対にアタシに対する嫌がらせだと思っただけさ、クライアントがアタシじゃないと嫌だってアタシの携帯にまで電話かけて来たのよ。それも無能の嫌がらせなんじゃないかとも思っただけ、あの無能じゃ話にならないのは事実なの』

息も吐く間もないという言葉を体現したかのような、そんな調子な叔母さんに……アタシは言おうとした言葉を飲み込んだのですよ。ごっくん、と。間違っても口から飛び出さないように、しつかと

『でね、折り返す飛行機に乗って戻らなきゃなくなつたの。一時間でも二時間でも時間が取れたなら、直に会って話すだけでもしたかったのに。』

それで……どう？ 元気にやってる？ 問題はない？』

「うん。元気。」

大丈夫、やってけるよ」

頬を伝うのは、汗ですとも。今日は暑いですからね。間違つても涙なんてものじゃないのです。

「いつものように成績表は国際便で送るから。」

夏休みが終わるまでには送り返してね」

『何か問題があつたら言つてよね。』

仕事よりも貴女のほうが大切なんだから』

電話向こうから聞こえた呼び出しのアナウンスに叔母さんは悪態をつく、ごめんねと小さく謝つて、それから電話を切りましたです。

泣いてなるものですか！

今は泣いちゃダメな時なのです。

叔母さんの仕事の邪魔にはならないと、叔母さんの厄介になると決まった時に誓つたのです！

頬に流れる？汗？を拭って、顔を上げます。

視界が歪んで見えるのもきつと、暑さのせいなのです。

「とりあえず、寢床を見つけないきゃ」

決意を胸にアタシは呟いて、歩き出したのです。明るい未来に！

自分で言ってなきや、やってられないですよ。ぐすん。

4、寢床を決めました。

夏休みには叔母さんと海外旅行に行くのだと、親しい友人たちには話してあったですよ。

遊ぶ予定を立てる都合がありましたからね。

なので友達の家泊めてとお願いするわけにはいかないのです。気を使わせるし、何より迷惑をかけることになっちゃいますからね。

そんな訳でアタシが今夜の宿に決めたのは、学校なのです。

運動部のために立派なシャワールームがあるのは、一般生徒なアタシでも知る有名なこと。

それに幸いにも今は初夏。暖房がなければ凍えてしまう冬とは違うのです。

こっそり黙って一泊するくらい、出来るに違いないのです。

戻ってきた学校は、部活の掛け声で賑やかでした。

こっそりシャワーを借りるにもまだ時間が早いですし、することが正直ありません。

じっとしていると要らないことばかり考えてしまいそうです。

少し考えて、散歩して身体を疲れさせることに決めたのです。

疲れていればきつと、硬い床でもぐっすり眠れるに違いありませんよ。

出来ることならお布団で寝たいですが、屋根のあるところで寝れるだけで十分だと思わなくてはならないのです。

なにせアタシは家無し子。首からがま口財布下げて、同情するなら金をくれと言わなきゃならないのです。

良くは知りませんが、叔母さんが前にそう言ってましたです。

アタシの通うこの学校は、無駄に広い敷地を林と森の間くらいの木々を取り囲んでるのです。

昼休みには木陰のベンチで午後の授業に向けて英気を養い、放課後にはやっぱり木陰で参考書を枕に睡眠学習をします。

じゅ、授業中は睡眠学習はしてないですよ。

第一候補は校舎内ですが、もしもの場合のために寢床になりそうな場所を探しながらの散歩です。

校門とは反対側まで歩いてきました。

そこで思い出したのです。

校舎のてっぺんから見ると、この辺りの木々の向こうになにやら屋根が見えるらしいという話を。

気のせいだという説と、ご近所の屋根を見間違えたのだという説とあります。

が、地図によるとそこも学校の敷地とひとくくり。

これは調査するべきでしょう！

別に色々ありすぎて、破れかぶれになってるわけじゃないですよ。

……たぶん。

初夏だというのにひんやりと涼しい木々の間を突き進みます。

とろそうに見えるると評判なチビなアタシですが、実は運動神経は悪くないのです。

狭い塀の上だつてちょちよいと歩けますし、身体だつて十分に柔らかいのです。その身のこなしはまるで猫のよう！　そう自負しているですよ。

決してあだ名が「みー」で、猫のようだからではありません。

そして進んだ先、そこにはバーネットの秘密の花園のような、立派な作りの塀と門があつたのです。

惜しむべきはアタシがそこに入る鍵を持っていないということ。

ですが隙間から見える東屋あずまやはとっても寝心地が良さそうなのです。

立ち去り難く、アタシは辺りを見回しましたです。

枝ぶりの立派な巨木が、アタシと寝床を遮る塀の側に立っており
ます。

これはアタシにあの木を登り、中に入れと運命の女神サマが言っているに違いないのです。

ええ、そうに違いないです！

なんとか手の届く高さの枝に飛びつき、そこからするすると木を登っていきます。

猫じゃなくてお猿さんのよう？　失礼な。

猫は木登りも得意なのです。……たまに高いところに登って降りられなくなる子もいますが、アタシは違うですよ！

「おおう」

登った先で見えたのは、見事に手入れされたハイソサエティでセレブリティなお庭でした。

思わず感嘆の声が漏れてしまったです。そのくらい凄いのです。でもって、やっぱりお昼寝に最適な東屋なのです！

手入れされたお庭ってことはですよ、あの門は開閉可能に違いな
いです。

こちら側からは開きませんでした。
ですが、きつと向こう側からは簡単に開けられるに違いありません。
それが無理でも、学校に戻ることは間違いなく出来るはずで
す！

そうと決まれば、

…………ふああつ。

えつとですね、中に入るのは後でも出来ることです。
アタシの身体は睡眠を欲しているみたいなのですよ、ええ。
なのでここはひとつ、仮眠を取ることにします。

ぽかぽかお日様の照る木の上。
寝るには最適の場所です。

5、奪われました。

目が覚めました。

で、目の前に見知らぬ男の人の顔がありました。

……これはどういう状況なのでしょう？

「おはよう」

男の人はにこにこと、思わず見惚れてしまうような笑顔で言います。

ここはアタシも「おはよう」と返すべきなのでしょうが。

それとも驚いてみるべきなのでしょうが。

寝起きの頭じゃうまく判断できないですが、そのどちらもナシな気がしますですよ。

「気持ち良さそうに寝てるから起こさなかったんだけど、聞いてもいいかな？」

な、何をでしょう。

不穏な空気を感じて後退ろうとするのですが、アタシの居る場所は木の幹の上。

いくら小柄なアタシとはいえ、これ以上枝先に行くのはマズイのです。

「なんでこんなところで寝てるのかな？」

その口調はあくまでも柔らかなのですが、その目は笑っていま

せんです。

返答によつてはたたつ斬るくらいの剣呑さが見てとれるですよ。

「ねっ」

「ね？」

「ね、眠かつたからっ」

どうにかして逃げられないかと頭をフル回転させながら、とりあえずその視線からは逃れようと、よそを向きます。

大型犬に睨まれた子猫はこんな気分なのかと、ちよつと現実逃避してたりするのは内緒です。

「それ、信じられると思う？」

どう見てもうちをノゾキしてるようにしか見えなかったよ？」

「のそ……き？」

学校と隣家の間には背の高い木々があつて覗くことは無理なハズです。

それにここの近くに隣家は無かつたと思うのですが？

「そつ、ノゾキ。

そこの塀から向こう側がうちの敷地。ほら、あの屋根がうち」

おおう、あの謎の屋根のお家の方なのですね。

近所のお家と見違えたわけじゃなかつたのですね。

学校が始まつたら、是非とも話して聞かせてあげなくてはいいけませんですよ。

納得がいつて、つい……ええ、本当についてです。顔を前に向けたら、男の人の顔が目の前にありました。

それも触れそうなほど近く。

「で？」

で、とは何なのでしょう。

というか、顔っ！ 近すぎですよっ！

「木の上から覗きをしていた子猫ちゃんは、俺に何か言うことがあるんじゃないのかな？」

「う、うううううううう」

「う？」

うわああああん！

この人、絶対にSですよ。鬼ですよ、鬼畜ですよ！

ごめんなさいと謝りたいのに、言葉にならなくて。

自分でも意味不明なことを口走っていると、男の人は思い切り人の悪い笑みを浮かべてくださりやがりました。

「素直に言ってくれないなら、身体に聞こうか？」

んで、ちゃんと。アタシの唇と、男の人の唇が……。

ぽふん。

何かが爆発して、吹っ飛ぶ音がしましたですよ。

目が覚めました。

で、目の前にあった男の人の顔を思い切り睨みつけ、その襟ぐりを掴みました。

「何してくれやがるんですか！

乙女の聖域を！ 大切なファーストキスを！」

怒鳴ったのはアタシのせいじゃないはずですよ。

目の前の男の人が不埒な真似をしてくれたせいですよ。

叔母さんは言っていました。

女の子の身体に同意無く触れる野郎は、
×××^びを×××^びして××^び
×してやるべきなんだと。

思わず伏字にしちゃったのは、それだけ過激な発言だからなんです。アタシは今、あの発言に猛烈に同意しててありますっ！

「……初めてだったの？」

男の人はびっくりしたような表情で、アタシを見てきます。

悪いですか！

別に大切にとっておいたわけじゃなくて、相手がいなかっただけです！

それでもアタシの大切な初物に変わりはないですよ！

むしろアタシが悪いことをしてる気すらしてくる表情ですが、こは心を鬼にしなくてはいけないのですよ。

こういう場合、女のほうから引いては駄目なのだと叔母さんは言っていました。

びしっと、毅然と！ 男のほうから謝罪を言わせなくてはならないのです！

………ならないのです。

ならないの……です。が。
……あう。

「の、ノーカウントにする。犬にでも噛まれたらと思って忘れるから。
だからその……」

遠いお空の上の叔母さん。

アタシにはびしっと、毅然とした対応は無理でしたです。

「ごめんね。」

でも、犬に噛まれただなんて傷付くな」

「あ、えっと、その。ごめ……」

心底傷付いたように聞こえるその言葉に思わず謝りかけ、はたと
気付きましたです。

なぜに、どうして！ アタシが謝ろうとしてるのかと！

「だからね、ファーストキスの謝罪はきちんとするから。

それを受けてくれないかな？」

「そ、それは……」

「駄目？」

負けたですよ。

なんか、ファーストキス以外にも色々大切なものを奪われた気が
しますですよ。

力なく頷いたアタシは、頭の中で精一杯巨大な白旗を振ったので
す。

叔母さん。

アタシはケガレテしまいましたですよ。

6、捕獲されました。

そのまま勢いで、誘導尋問の如く、アタシは個人情報から身の上話まで。

ピンからキリまで話すハメになったですよ。

すると男の人は少し考えるように首を傾げたかと思うと、「じゃあ、うちに来ない？」と、名案とばかりに言って下さりやがりましたです。

こんな得体の知れない不屈き者の誘いだというのがですよ、思わず頷きそうになってしまったですよ。

脳裏に柔らかい寝床と、温かい食事が浮んだからではないと。アタシは声を大にして主張いたします！

NOと言おうと、決意を胸に開いたアタシの口からは、なぜかアタシもびっくりな言葉が飛び出しました。

「……………いいの？」

アタシのお口っ！ にゃんということをし！

男の甘い言葉には気をつけなさいと、叔母さんが常々言ってたじやないですか！

一度口から飛び出た言葉は戻すことが出来ないのです。

冗談だと返ってくるのが半分、いいよと返ってくるのが半分。そんな期待で心の天秤がゆらゆら動きます。

「いいよ。」

文句言っているかも知れないけど、俺の決定には逆らわないか

ら」

ん？ 文句を言うの、ですか？

「大丈夫、ひとり暮らしじゃないから」

アタシの心の疑問が通じたかのように、その人は笑顔で言います。
「というか、ソレを先に言えってんですよ。」

家族と同居しているなら、素直に頷けたと言っのに！

「それに俺、女には困ってないし。胸も尻もある後腐れの無い友達
がいるし」

そのトモダチには妙なニュアンスがありましたですよ！

んでもって、さり気なくアタシが乳も尻もないちんくしゃだと貶
しましたですよ！

「ねえ、みー。」

いい猫でいられるなら、次のアパートが決まるまでうちにおいて
あげる」

まるで猫を呼ぶかのようにアタシの名前を呼び、猫の喉を撫でて
いるかのような手つきでアタシの顎の下を撫でます。

やっぱり不穏な？ イイコ？ です。

それでも魅力的すぎる誘いなのです。

「俺の謝罪、受けてくれるって言ったよね？」

返事は？」

顔を背けられないように固定され、再び顔が近づけられます。

さつきよりは遠いけど、息がかかるくらいには十分近い距離。
アタシを見るその目の中に、アタシが映りこんでます。

「と」

「と？」

「泊めてってアタシからお願いしたんじゃないんだからねっ」

素直にお願いするのが癪だったってのもあります。

だけどそれ以上に、ものすごく、納得がいかない点が多すぎるですよ！

だからそんな物言いになったのです。

が、どうやらアタシの返事はお気に召さなかったようなのですよ。

「まあ、今はそれで勘弁してあげる」

にやり。そう擬音をつけたくなるような笑みを浮かべやがったのです。

でもって、ちゅっ。と音を立て、アタシの鼻のてっぺんにキスしやがったのですよ！

一度で飽き足らず、二度も！

乙女に同意を得ずにキスをするなんて！

ここは怒って正しいのです。

責められるべきは、思わず手が出たアタシではなくこの不屈き者。決してアタシは悪くないのです！

「家に着いたら真っ先にお仕置きだね、みー」

ふぎやーっ！

数秒前のアタシ、怨むですよーっ！

7、グルーミングされました。

思い出したら泣けてきましたよ。

半日足らずの間でしかないはずなのですが、不幸を幕の内弁当にしたかのような豪華さですよ。

「ああ、やっぱりサイズが合わないわ」

更に追加するなら、道中あの不埒な不屈き者に？ご主人様？と呼ぶように強要されたですよ。

というか、名前を尋ねたら教えてくれなかったのです。

だから何と呼べばいいかという質問に「ご主人様？」と半疑問系で返ってきたに過ぎないのですが。

「でもこの手のデザインはだばつとしてても可愛いから、見苦しいってことはないわ」

そう言っアタシの服を直してくれたのは、いま着ている淡いピンク色した裾に小花を散らしたデザインのワンピースの持ち主であるヒト。

丸顔で、たれ目。でもって小柄で少しぽっちゃり体系でと、とっそこ走る愛玩ネズミに雰囲気がそっくりなお方なのです。

驚くことに愛称はハム子さんだそうです。

「娘でもいればサイズのおう物があつたかも知れないけど、うちは息子ばかりだったから」

「いえ、服を貸していただけただけで十分です」

にへらと笑って御礼を言うと、がばりと、感極まった様子で抱き

つかれましたです。

どうやら、ハム子さんの中でアタシは見事薄幸少女として認識されたようです。

玄関で出会ったおにーさんに説明したのと違い、ハム子さんにはきちんと説明されたのですよ。あの俺様ご主人様。

アタシのアパートが火事にあい追い出されたこととか。

実質的な一人暮らしで、夏休みを過ごすことになってた叔母さんに急な仕事が入ったこととか。

そのための認識なのです。

一応は否定しようと思ったのですが……否定できる要素が見つからなかったのですよ。

だって更に、俺様でサドに違いないヒトに捕獲されてしまったのですし。

「やっぱり女の子はいいわぁ。

若様から好きなように注文していいって言われてるの。腕がなるわ」

……………ハム子さんの言葉は、聞こえないですよ聞こえないですよー。

ここはアタシの立ち位置を再認識して、心を平常に保つです。

おおう、アタシの不幸を振り返ってたら鬼ババへの怒りも再燃してきたですよ。

許すまじ、なのです。

「フリルとかレースとか、物心ついた頃には拒否してくれちゃったから。」

アリスのエプロンドレスとか手作りしたかったのに、酷いわよね」

ねー、と同意を求められても非常に困るのですが。
どちらかといえば、アタシはフリフリひらひらといったのは苦手なですよ。

身長と童顔とで、ただでさえ酷い時には小学生に間違えられるのです。つるべたなお子様体系のせいじゃないと、アタシは主張いたしますですよ。ええ！

「だからとっても嬉しいの」

ハム子さんはそううふふと笑うと、どこからともなく危険なブツを取り出しました。

逃げたくなったのは、否定しません。
というか、どうしてそんなものを持っておられるのですか！

「こんな時のために用意しておいてよかったわぁ」

こんな時って、どんな時なのですか！

ハム子さんの手には、パステルピンクのふわふわしたブツが握られています。

それ以外にも、ふわふわしてたりひらひらしてたりするブツが…
…。

めまいがしましたですよ。

倒れたら目が覚めた時の惨状が思い浮かぶので、頑張るですが。

「ワンピースたけじゃ寂しいものねー」

いいえっ、むしろシンプルなワンピースが素敵だと思うですよ！

思わず後退りましたが、その間はあるという間に詰められました。で、ブツがアタシの頭にあてられましたですよ！

「うーん、淡い色よりもしっかりした色のほうが似合うみたい」

そんな呟きと共に、別のブツがあてられた気配がしました。視界の端っことでビビットなピンクが揺れてるので間違いないはず。です。

それからハム子さんが満足いくまで……恐ろしく長い体感時間を過ごしました。

とりあえず満足したらしいハム子さんに見せてもらった鏡の中にいたアタシは、あのシンプルなワンピースはドコ行ったっ！？と言いたくなる出来だったのです。

頭のとっぺんから、足の先まで。ピンクとレースのオンパレード。

悪夢ですよ、叔母さん。

8、脅迫されました。

「若様、お嬢様をお連れいたしました」

強制連行のような心持ちで連れていかれた先で、難しい顔したおにーさんに睨まれました。

なんでしょうか、その珍獣でも見るかのような視線は。

身長も胸もちんくりんかも知れないですが、アタシは立派なレディなのですよ！

珍獣ではないのです！

格好は珍獣一歩手前だと自覚しておりますですが！

「わたしの手持ちだけでコーディネートしたので、お嬢様には不似合いかも知れませんが。

いかがでしょうか、若様」

一触即発的に思わず睨みあってしまったアタシとおにーさんを見無視して、ハム子さんは続けます。

小柄だっていうのに、胆は座ってるのですね。ハム子さんは。

これはアタシも見習わなくては。

「うん、制服姿よりは似合ってるね。あれは馬子にも衣装だったし。これでサイズは把握できたと思うから、一揃い揃えておいてくれないか。説明した通りだから、部屋から持ち出した私物を使うにも抵抗があるだろうしね」

「腕がなりますわ。」

きつと若様の満足のいく出来になりますよ、お嬢様はとても愛らしいかたですから」

ハム子さんとその人は意味深に笑いあったかと思うと、アタシの洋服の手配と夕飯の仕度があると、ハム子さんは退出してしまったのです。

残されたのは、不協和音を奏でる三人なのです。
おっそろしいですよ。

「乾、それじゃあさつき話した通りに頼むね。

現場には一度くらいはいく必要があるだろうけど、それ以外はお前と鷺沼に任せる。彼女とはレオを通じて許可を得てある」

「かしこまりました」

それをわかっているのかいないのか。

につこり笑顔でおいーさんに退室を促すと、おいーさんは不機嫌そうな顔をのままに頭をさげた。

んで、顔をあげくるりと踵かかひすを返す際に……アタシ睨にらまれましたですよ！

魂消るかと思ったですよ！

思わず後退ってしまったですよ！

「みー、こっちにおいで」

キィ、ばたん。と、大きな扉には不釣合いな軽い音を立て扉が閉まったかと思うと、その声はアタシにかかりましたです。

ゆっくり恐る恐る振り返ると、そこには笑みを携えたその人が。

……目が、笑ってないですよ？ 見事な笑顔なのに？

だ、誰か、助けてくださいです。

いたいけな少女を苛めようとする悪い大人がいるですよ！

「いいかな、みー。」

ここにいる間は俺の言葉は絶対、俺の言葉に逆らうことは許されないんだよ」

なかなか動こうとしないアタシに痺れを切らしたのか、おもむろに立ち上がるとアタシとの距離を詰めたです。

その無駄に長い脚で数歩。たったそれだけでアタシを見下ろす位置に來ると、むんずとアタシの腰に手を回して引き寄せてくれやがりましたです。

「良い猫こでいるって約束できるなら、火事の件とか、君の叔母さんに黙っててあげる。」

「だけどそれを守れないなら、保護者に言わなきゃならないね」

「お、脅す気」

「真つ当な取り引きのつもりなんだけどな。」

みーは住む家を無くして困ってる。そんなみーを泊めてあげる。ギブアンドテイクだよな？」

んんっ？

アタシにした不埒な事に対する謝罪はドコにいきやがりました？
というか、どの辺がギブアンドテイクなのか理解出来ないのです
が。

「だからここにいる間の決まりごと。ここにいる間は俺のいうことを聞く。」

ね、簡単だろ？」

確かに簡単かも知れないですが、腑に落ちないことだらけですっ！

「それから俺のことは、ご主人様。OK?」

どこもかしこもOKな訳、あるわけないじゃないですか！

だけど伯母さんに言っぞと脅されてはアタシには逆らうことも出来ず。

渋々と頷くしか出来なかったのです。

「いいこだ、みー。

だけどさつき俺の言うことを素直にきかなかった分のお仕置きをしなきゃだね」

……………。

はう。頭の中が真っ白になってたですよ。

お仕置きって！

冗談じゃないですよ。

そもそも何様ですか！

……………ご主人様でしたですね。はい。

9、お仕置きされました。

抱き上げられて、移動して。

それからストンと降ろされた先は、なぜか、お、そ、……………。

ええい！ これ以上恥らってなんていられないですよ。こん畜生めが！

ご主人様の膝の上でしたよ。

それが、どうしたですか！

「みー、随分不遜なこと考えてない？」

……………き、気のせいですよー。

というか、どうしてアタシの考えてることがわかったのですか！

「顔に全部出てるから。」

ところで、クッキーとプリンならどっちがいい？」

はう。顔に出てましたですか。

そういえば、よく顔に出る子だと昔は言われたですね。

お母さんには、さすがアタシを産んだだけのことはあってますとお見通しだったです。

懐かしいですね。

…………視線が！ ご主人様の視線が！

さっさと答えやがれと無言のプレッシャーをかけてくれやがります！

ええっと、クッキーとプリンですか。ふむ。

あのサクツとした歯ごたえもアタシは好きです。チョコチップだったり、バターたっぷりだったり、ナッツが混ざってあったり乗ったり、ジャムや餡が乗ってたりするのも好きです。

が、しかしです！

ミルクたっぷりなのめらかプリンには敵うはずがないのです！

ほろ苦いカラメルソースと、ミルクと卵の絶妙なタッグのコントラスト。これはもう、最強です。ええ！

焼きプリンの表面の焦げたところも素晴らしいですし、ミルクプリンのあの口の中で広がるミルクの風味も棄て難いです。

……………おおう。想像しただけでよだが。

「聞くまでもなさそうだけど、答えは出た？」

「プリンで！」

ぎゅっと手を握り、自由を宣言するかのようになつたアタシに、ご主人様は笑顔でスプーンを差し出してくださりやがりましたです。そのスプーンの上には、アタシを魅了して止まない黄金色の柔肌が。

いつの間につ！

「ほら、みー。口をあけて」

というかですね、どうしてこういうことになつてるのですか！

さつきはお仕置きがどうのって言ってたですよ。

お膝の上でアーン。

これはお仕置きというよりも、バカップルって感じではありませんか！

確かに羞恥で悶えられますけども！

アタシの精神にはとてつもないダメージを与えてはいますけれども！

「うーん、仕方ないなあ」

一向に口をあけようとしないうアタシに、ご主人様はやつと諦めたみたいです。

魅惑の物体を自分の口の中に放り込みましたです。

嗚呼、麗しのプリンちゃん……。

アタシが食べてあげられなくてゴメンなさいです。

恨みがましい目で見てしまったのは、きっと仕方のないことだったんです。

プリンちゃんだって、この俺様鬼畜不埒男に食べられるより、きゅーとでぶりちいなアタシに食べられたいはずです。

あうー。プリンちゃんー。

「うん、美味しい」

そしてにやりとアタシに視線が。

なにやら企むような視線ではありますが、そんなことよりも魅惑のプリンちゃんが目の前にあるというのに食べられないことのほうが大問題なのですよ！

シヨックなのですよー！！

再びプリンちゃんがスプーンにカドワカされ、アタシのお口にではなく俺様（中略）男の口に。

うー。プリンちゃ……。

「……んぐっ！」

は、はにゃがっ！ アタシの可愛い鼻が摘ままれたです！
アタシの可愛い鼻が低くなったらどうしてくれるんですか。
っていうか、何してください。

……。

……。

ん、ぎゃあああああああつ！

く、口の中に甘くて濃厚なプリンちゃんと一緒にっ。
うにゅんって！ むしろ、おらおらそのけそのけって！
アタシの舌にプリンちゃんを押し付けるように絡めてきやがりや
がつて！

ぼふん。

本日二度目の、頭の中の何かが爆発して吹っ飛ぶ音がしましたですよ。

叔母さん、アタシの頭はもう限界れす。もーだめれす。

……はう。

10、色々とされました。

頭が完全に目覚めたのは朝ごはんを食べている時でした。
ええ、朝ごはんなのです。晩ごはんではないのです。

つまりですね、^び×××があつた後ですね、色々あつたせいなのか
ぐっすり眠ってしまったみたいでして。

気が付いたら朝でした。という訳なのですよ。

伏字にしたのは……思い出したくないからなのです。
微妙な乙女心を察してください。

^び唇への、ファーストキスに続いてセカンドキスまで！ しかも×
××！
もうお嫁に行けない。そんな気分なのですよ。

それですね、一緒に朝食をとってワガママを叶えるためにアタシは起こされました。

普段は寝起きが悪くないのですが、疲れのせいかなかなか起きないアタシをですね、ハム子さんが甲斐甲斐しく世話してくださいましてですね。

つまり何が言いたいのかと言いますとですね、小さい子のように顔を洗われ着替えさせられたのですよ！

恥ずかしいですよ！

屈辱ですよ！

顔を洗われたり着替えさせられたことがではなく、昨日以上にふりつりのぴらっぴらの格好をさせられたのがですよ！

しかも昨日と違って、サイズは全部アタシにぴったし。
頭の天辺てっぺんから足の爪先つまさきまで、見事にコーディネートさせられてる
のです！ コーディネートはこーでねーという、見本の如く！

……………こほん。

兎にも角にも、この屈辱にアタシは耐えられませんです！

「みー、美味しい？」

「はひ、おいひいれす」

朝のことを思い出しながらとろりと口の中で蕩ける極上のプリン
に舌鼓を打っていたアタシは、レディとしてはあり得ないことに、
口の中に食べ物が入っている状態で喋ってしまったです。

仕方が無いのです。プリンは正義なのです！

幸い、ハム子さんからお叱りの視線を頂いただけで済んだです。

……………もう、しないでしょ。

うちの母はアタシに最低限の食事のマナーを叩き込んでくれたの
です。

その理由というのがですね、美味しくご飯を食べるために目の前
で不快な所作をされたくない、というなんとも自分本位なものであ
ったりするのですが。

そんな訳で、口の中にものが入っている時に喋ったなんて……………

…あう、母の鬼のような形相が脳裏に浮んだです。

「それは良かった」

すると聖人君子もかくやという笑みで、微笑みやがりましたです。変態のくせにい。俺様のくせにい。

心の中だけでぶつぶつと呟いて、叔母さん仕込みの笑顔でそれはまるっと隠すです。

色の白いのは七難隠すそうですが、乙女の笑顔は百難隠すそうです。

百も災難があって笑顔を浮かべられるのはかなりマゾなひとだけだと思うのですが、考えたら負けと頭の隅に追いやります。

「ああ、そうだ。

みーのアパートの立会いには、みーが直接立ち会わなくても済むようにこちらで手を打っておくから。みーも大家には会いたくないだろうし」

確かに、あの鬼ババとは顔をあわせたくないです。

普段ならまだマシですが、色々と打ちひしがれてる今はとてもそんな元気がないのです。

だから素直に首を縦に振ります。

「立会いに誰もいないわけにはいかないから、代理としてうちお抱えの弁護士を行かせるよ。

必要ならアレの判断でみーに連絡を取るように言ってるけど、アレはまだ若いが優秀な部類に入るからね。

心配はいらないよ」

「まあ、鷺沼のぼっちゃんにお嬢様のことをお願いなさるんですね。それなら安心ですわ」

誰に頼むのか、思い当たる人物がいたのかハム子さんは名案とばかりに手を叩いて満足げに頷いてた。

鷺沼さん。さぎぬま。さぎ……。

……うん、覚えましたです。鳥さんですね。

どんな経緯があるにせよ、アタシのことをお願いするのだから名前くらいは記憶しておかなきゃです。

きっと会う機会もあるでしょうし、その時にはきちんとお礼を言わねばです。

「そういう訳だから、みーは家で良い猫こにしててね。
帰って来た時もその格好だと嬉しいな」

昨日のようなことがあっても困るので、とりあえず大人しく頷きましたです。

さり気なく着替える気でいたのが見抜かれて阻止されましたが、これも我慢するしかないですね。

触らぬ神に祟りなし。というやつです。

まさかアルコールの入った叔母さん以外に当てはまるヒトがいるとは思わなかったですよ。

11、真相が判明しました。

アタシが拾われた翌日以降、ご主人様は外出することもなく家でなにやら机に向かって仕事をされてましたです。

三階にあるご主人様の仕事部屋にはバルコニーに続く大きな窓がありました、そこにアタシ専用の椅子が置かれてそこがアタシの定位置となってます。

のんびりまったり。

家の中でくつろぐ飼い猫ってこんな気分なのかと、飼い猫ライフを満喫中です。

……まあ、アタシのちょっとしたミスでご主人様と一緒に寝ることになったりとかですね、色々と不満はあるんです。

あるんですが、なんか色々諦めたというか慣れたというか。そんな日々が続いているですよ。

夜抱き枕にされることと、ハム子さんにふりっふりのぴらっぴらな服を着せられることと、アレなティータイムを除けば……快適ですし。

犬さんのアレな視線も気にしないことに決めましたですし。

「みー、ちよつとこつちにおいで」

半分寝ていたアタシはご主人様の声に立ち上がると、応接スペースのソファで手招きしてやがります。しかも何時の間にやら、来客がいやがるですよ。

とてとてと歩きまして、ご主人様の前で立ち止まって首を傾げます。

なあに？

言うのも面倒なので、仕草で訊ねるですよ。

「鷺沼がアパートの報告書を持ってきたんだ。みーも知りたいだろう？」

それだけで通じたのか、ご主人様は笑顔でそう尋ねてきましたです。

それは当然知りたいですよ！

アタシが家なしになった原因なのですから！

それはさておき、鷺沼さん？

ええっと、どちらさまでした……………おお、思い出したですよ。ご主人様お抱えで、ハム子さんがぼっちゃまとべた褒めしていた、弁護士の鳥さんですね。

腕を引かれるままティータイムの時のようにご主人様のお膝の上に乗っかりまして、アタシのアパートのごたごたを片付けてくれた彼を見やります。

イメージとしましてはですね、生真面目！を形にしたようなヒトです。

ですが、べったり固定された七三分けと、時代遅れのださ黒縁眼鏡。なぜかダブルの金ボタンスーツで、胸元では紐ネクタイが揺れてるです。

……………アタシのふりふりぴらぴらもイタイと思いますが、このヒトも相当ですよ！

「お嬢様、この度アパートの事後処理を担当致しました鷺沼と申し

ます。

格好は……気にしないでいただけると。若の元を訪問すると祖母に知られて、このようにさせられまして」

同士ですか！

イタイとか思っちゃって、申し訳ないですよ。

言われてみれば、スーツのサイズがあってない気がしますね。だぼっとしてるし、丈も足りてないですし。

……………うん。

「みー、あまりじろじろ見ない」

まじまじと観察してしまつたら、ご主人様に怒られましたです。そうですよ。アタシだってじろじろ見られたら気分良くないですし。

しゅんとなったアタシの頭をご主人様は撫で、それから鳥さんに話を促しましたです。

鳥さんはそれを受け、取り出した紙の束を捲りながら読み上げます。

「出火の原因は、老朽化した外灯の配線を放置したことによるものでした。

作った当時の大工に確認を取れなかったのどうしてそうなっているのかわからないのですが、外灯の配線がなぜか各部屋の台所部分を通っていたんですよ。外に露出している部分ほどの劣化はみられませんでしたが、許可をとって壁を剥がさせてもらった部屋でもいつ出火してもおかしくないような劣化が見られましたから間違いないでしょう。

消防の見解も壁の中の配線からの出火でしたし。

また、別の住人の話ですが、外灯の配線の老朽化に気付いた住人が危ないから直してくれと大家にお願いしたところ、けんもほろろにされた。外に露出していた場所はビニルテープを巻くだけに済ませ、これ以上を求めるなら自分で業者に頼めども」

あー、そういえば、女優を目指すおねーさんがそんなことを言われたと言って怒っていた記憶があるですよ。

不規則な生活をしてるおねーさんだったので、ほとんど顔をあわせなかったのですが。

「その外灯は共有部分だよな？」

「はい。ですのでお嬢様にこの度の出火の落ち度はありません。むしろ慰謝料を請求できるかと」

ほっとしましたですよ。

慰謝料うんぬんはとりあえずおいておくとしてです、出火の原因がアタシじゃなくてよかったです。

これで叔母さんに心配をかけなくて済むですよ。

思わずうつるときちゃったのを隠すために、手近にあったご主人様に抱きつくです。

夜に抱き枕にされてるとですね、抱きつくのが今更って気分なんですよ。

「みー、どうしたい？」

望むなら、火災の慰謝料だけじゃなくて数々の暴言に対する慰謝料ももぎ取ってあげるよ？」

「……それはいい。」

叔母さんに迷惑をかけないですむ、新しい部屋さえなんとかねば」

鼻声だった自覚はあるです。

でも仕方ないのです、叔母さんに迷惑をかけてしまうんじゃないかと……ずっと気が気じゃなかったんです。

飼いネコライフをただ満喫してたわけじゃないんです。

「それなら簡単に手配できる。

鷺沼、学校の手続きは任せたよ」

「かしこまりました」

……………んお？

なにをかしこまったんですか、鳥さん？

11、真相が判明しました。（後書き）

実際に本文中のような判断を弁護士がするか、謎です。

12、決断を迫られました。

「学校まで徒歩0分、家事の類の心配も一切いらない。
最高の下宿先だと思わない？　ここ」

理解出来ないでいるアタシに、ご主人様はそれは楽しそうに言い
やがりました。

魅力的なんてもんじゃないくらい、魅力はあるですよ。

お昼寝に最適の場所はあるし、ご飯は美味しいし、ミルクを使っ
たデザートは最高だし。

まあ、色々と不満はあるんですが。

それよりも魅力のほうが大きいのは確かなのです。

なのですが、

「無理っ！」

叔母さんになんて説明すればよいのか。アタシにはさっぱりなの
ですよ！

なのでアタシは必死に首を横に振ります。

「叔母さんのことを心配してるなら、気にする必要はないよ。
みーの叔母さん、結婚してロンドンを拠点に生活することになる
から。俺が保護者代理を引き受けさせてもらうに障害はない」

………はい？

そんな話、聞いたこと無いですよ？

男なんて信用ならない、が口癖の叔母さんなのですよ？

結婚する相手がいるなんて話、聞いたことがないですよ？

「レオのやつ、いままで女に不自由したことがないからって女の口説き方もわからなかったんだよ。笑えるよね。」

一目惚れしてからずっと仕事の関係だけで我慢してたなんて、冗談みたいな話だよな」

意味がわかんないですよ。

そのレオさんとやらと、アタシの叔母さんがどうして一緒の話に出てくるんですか？

「意味がわからないって顔してるね？

間抜けな顔のみーもかわいい」

んをつ！

間抜けとはレディに対して失敬な！

ご主人様はアタシのそんな心に気付いたのかにやりと笑うと、頭をぼんぽんと軽く叩いてくれやがりました。

「褒めてるんだよ？

俺、誰かをかわいいと思ったのなんて、始めてだしね」

その？かわいい？は絶対に愛玩動物ペットに対するそれで、間違っても人間のレディに対するそれじゃないと、アタシは主張するですよ！

「……まあ、どっちでもいいじゃない？

かわいい事に違いはないんだし」

一緒じゃないですよ！

そうやって女心を理解出来ないから、男の人は女性に呆れられるのですよ。

毎日の些細な「アイシテル」が女性の心を掴むのです。イベントの時に特大の「アイシテル」を捧げるだけでは駄目なのですよ！

別にアタシはご主人様に「アイシテル」と言って欲しいわけじゃないですよ？

コレは叔母さんの主張なのです！

「暫く一緒にいて、俺がみーの嫌がることをすることがあった？ベッドの中でだって、優しくしただろう？」

もの凄く卑猥に聞こえますが、単純に抱き枕にされただけの関係ですよ！

っていうか、嫌がることだらけじゃないですか！

お膝の上だって、出来ることなら遠慮したいのですよ！

「みーに与えられた選択肢はふたつ。

叔母さんと一緒にロンドンに行くか、俺のところに残るか」

どっちかだよ？

うーうーうー。

学校のお受験英語ですら厳しいアタシに、英語圏で生活しろだなんてそんな無理難題を突きつけられても困るですよ。

その上、ご主人様の言い分を信じるなら新婚さんな叔母さんの家に瘤がくっついて行くのも気が引けるのです。

でもでもでも、でもなのです。

いくらご飯が美味しくてデザートが絶品でアタシに出されるミルクが極上のそれだとしてもです、このままご主人様のところで厄介になるのはアタシのプライドとか色々なものがですね。

うー、悩むのですよ。

「美衣ちゃん！」

聞きなれた声がドアを勢いよく開け放たれる音と一緒に聞こえ顔を向けると、そこには叔母さんが立っていましたです。

両脇にイケメンふたりを引き連れて。

……いえ、片方は犬さんなんですけどね。

13、嵐が通り過ぎました。

……………あふう。

なんでなのでしょう、ため息が尽きないですよ。

アタシはマイソファで丸くなると、幾度目かわからないため息をついたのです。

アレは強烈でしたのです。破壊力抜群でしたのです。

今まで一緒に住んでるなんてのは書類上だけのもので、現実には一人暮らしだったから気付かなかったのです。

体力をこっそり奪い取られた気分なのですよ。

結論を先に言いますとですね、アタシは敵前逃亡しましたのですよ。

叔母さんと一緒に暮らすなんて勇者なことはアタシには無理だと悟ったのですよ。

叔母さんを捕獲したというレオさんを褒め称えたい気分で一杯なのです。

つまりですね、叔母さんはアルコールが入ってなくても強烈だったのです。

アタシには一緒に暮らして、あの過剰な愛をこの身に受ける勇氣はなかったのです。

叔母さんは部屋に入ってくるなり、ご主人様の膝の上で固まるア

タシに僅かに息を呑んだだけで、マシンガンの如く言ってくれました。

アタシの愛しの姪になしてくれてるのよ。

その子はアタシが姉さんから預かってる大切な子なのよ。

悪い虫がつかないように、男の醜悪さをきつちりと言い含めて育てたのに。よりによってレオの知り合いなんかに！

嗚呼、神様！ アタシが至らないばかりにあの子に苦勞をかける事になってしまったわ。アタシはどう責任をとればいいのかしら。そもそもそのアンタ、アタシの愛しの姪を傷物にした責任をとれない。

本音を言うなら今すぐにも掻つ攫いたいところだけど、子どもには父親が必要だもの。それがどんなに卑劣で救いようのない悪辣な男だとしても！

類が友を呼ぶつてのは本当だったのね！

とまあ、色々と要約するとこんな感じの内容をほぼ一呼吸で言ってくれたですよ。

途中で英語とか、フランス語やドイツ語らしきアタシには理解出来ない言語でも罵りらしき言葉を言っていたです。

荒い口調とそれを聞いて微妙な表情を浮かべた犬さんからの推測ですけど、あながち間違っていないと思うですよ。

叔母さんはまるで、猫が背筋を逆立てて威嚇してるみたいだったのです。

レオさんとやらと何があったのか聞いてみたい気もしたですが、まさしく「触らぬ神にたたりなし」と判断したアタシは貝のように口を噤むことに決めました。

レオさんの腕の中に捕らえられ、こちらを 正確にはご主人様

をですが 睨んでくる叔母さん。

相も変らずご主人様のお膝の上だったアタシはご主人様をちらりと見上げ、表情ひとつ変えなかったご主人様に決意しましたです。

「あのね、アタシこのヒトのところにお世話になるから」

ファーストなキスもファーストなべろちゅーも奪われたけど、傷物と呼ばれる関係になってないし。

冗談でなく、愛玩動物扱いだし。

色々と不満や不安はあるですよ。

だけど叔母さんとの生活を天秤にかけたら、こっちのほうがマシかなあと思つた次第なのですよ。はい。

叔母さんはその目に大粒の涙を浮かべるとレオさんに抱きついて、言ってくれました。

あの×××の×××を×××してやりたい。

伏字のところは右から左に、頭の中に残らずに素通りした単語なのです。聞こえてはいたはずなのですが、脳が認識することを拒否したのですよ。

爆弾発言をしてくれた叔母さんをレオさんは抱きかかえると、ご主人様とアタシにホテルに戻る旨を言つて、犬さんを連れて去つていったのです。

アタシは悟つたのです。

叔母さんは嵐、それもアタシでは到底太刀打ち出来ないほどの巨

大台風だと！

うーうーうー。

叔母さんはスーパーウーマンに違いはなかったです。

ですがそれが「デキル女」という方向ではなく、恐ろしく迷惑だという事実をアタシの心と頭が認めたくないと拒否してるですよ。

「みー、頭の整理がついたらこっちにおいで。
レオが持ってきた菓子でお茶にしよう」

アタシを放っておいてくれたご主人様が、頃合いを見計らったように声をかけてきましたです。

菓子という言葉に反応してしまったのは、アタシが食い汚いからではないと主張しますです。

頭を使うと、エネルギーを消費するのです。

これはアタシの身体が糖分を要求しているということなのです。

ソファアーの上で膝立ちになったアタシにご主人様は笑みを浮かべ、ちよいちよいと手招きします。

「おいで、みー」

それから念を押すようにもう一度呼ばれ、アタシはご主人様のところに向かったのです。

普段なら渋々と向かうところですが、軽やかな足取りで。

保護者公認の飼い猫ライフの始まりなのです。

飼い主に媚を売っておくのも悪くないんじゃないかと、飼^{ペット}い猫なアタシは考えたのですよ。

13、嵐が通り過ぎました。（後書き）

とりあえず、ここでプロローグ的なものは終り。
続きの構想があるので、たぶん、続きます。

猫とティータイム（前書き）

短編より移行。

たぶん、「13、嵐が通り過ぎました。」後のこと。

猫とティータイム

吾輩は猫である、名前はまだない。

おそらく日本で一番有名な猫といえば、夏目漱石のこの猫だと思います。

それともテレビで話題なアイドル猫でしょうか。駅長猫までいるというし、活字を読まない人が増えてるって話だし。

どうしてそんなことを考えてるかというと、一応はネコであるアタシとしましては、ほんのちょっぴり気になるのです。

現実逃避ではないと、念のため申し上げておきます。

信じてはもらえないとわかってますし、自分でも無理があるなと思います。一応。

「みー、こっちにおいで」

ご主人様の仕事部屋に置かれたふかつふかのソファア。そこがアタシの定位置なのですが、呼ばれれば仕方なくご主人様のところにアタシは行くのです。

一宿一飯の恩義というやつです。

……既に一週間は世話になってるだろというツツコミは不要です。

近くまで来たアタシの不満だだ漏れな顔を見て満足そうに素晴らしい笑みを浮かべられたご主人様は、ぽんぽんと自らの膝を叩かれます。

これはアタシに、ここに乘れと、そうおっしゃりたいのでございますね。

丁重に辞退申し上げたいところですが、拒否したなら無理矢理に路線変更することが分かつてるので、素直にそれに従います。屈辱です。

「猫は寝子から転じたともいうけど、みーは本当に良く寝る。俺が呼ばなきゃずっと寝ているね」

膝の上に乗せたアタシの頭を撫でながら、ご主人様は愉快そうに言われます。

それにアタシはぷいとそっぽを向きます。ヒトをからかうようなこのご主人様の視線は嫌いなのです。

だって、眠いものは仕方ないのです。それをどうこう言われても困るのです。

「若様、失礼いたします」

そこにドアをノックする音が響いて、ご主人様の返事後、いつものように音もなく男の人が入ってきます。

スーツではない黒の上下に身を包んだ、綺麗に髪を撫でつけた銀縁眼鏡のおにーさんです。確か、乾さんいぬいとおっしゃる執事さん……いえ、家令さんだそうです。

執事と思ったとたん、考えが筒抜けだったかのように睨まれました。

恐ろしいです。

きつと超能力が何かお持ちなんですよ。

ご主人様の欲しいものをどこからともなく差し出したり、気配もさせずに移動されてたりしますから。

「本日はダージリンの良い葉が手に入りましたのでそちらと、シェリテのフルーツタルト。お嬢様にはご指示通りミルクをお持ちしました」

部屋には立派な応接セットがある（もちろんアタシの寢床となっているソファ―とは別！）にもかかわらず、乾さんはそれらを執務机に並べていきます。

あつという間に紙で埋め尽くされていた机には十分なスペースが作られ、そこに並べられていきます。

これもきつと、超能力のなせる技ですね。

それを感じ嘆することにして、アタシに向けられたらしい憐れみの視線は無視します。スルーです。

これから行われるだろうお茶の光景は、一週間経っても慣れないくらい、アタシの精神衛生上とてもよろしくないのです。

「さあ、みー。ミルクを飲ませてあげよう」

にやりと笑ったご主人様は、ミルクの入った平皿をアタシの前に突き出します。

うつつ、ミルクは大好きなのです。

なのですが、これはいかなものかと思うのです！

羞恥にプライド、恩義におしおき。心の天秤がぐらぐら揺れます。せめてお皿を机に置いて欲しいと、上目でご主人様を見上げますが、ご主人様はにこやかに微笑まれたまま。

「どうした、みー？」

初日のおしおきが脳裏に浮かびます。

……も一度アレをやられると思えば、この程度っ！ 女は度胸、なのです！

アタシは意を決してお皿に顔を寄せ、ミルクに舌をのばします。

ぴちゃ、ぴちゃ。

アタシがミルクを舐める音が、やけに耳に障ります。顔は真っ赤になつてることでしょうか。

それでも農場から特別に運ばせているというミルクはとってもおいしいのです。スーパーのパック牛乳とは訳が違います。この状況でも味の違いがわかるほどに。

うーうーうー。

色々なものと格闘しながら、それでもこの時間を一分一秒でも短

くしようと、ミルクと格闘します。

最後のひと舐めをし、文句あるかとはかりにご主人様を睨みつけます。

「……こんなに顔を汚して」

仕方ない子だ。

ご主人様はそう言われたかと思うと、何をとち狂ったのか、アタシの唇を！ 乙女の汚れなき神聖な場所を！ その無駄に形のよい唇で吸いやがったのです！

思わず後ろに下がったせいで、後転するような格好で椅子から落ちたのは、今は問題にするところじゃありません！

それよりも問題にするところがあるのです！

「みー、裾がめくれて脚が丸見えだよ。

もしかして誘ってる？」

「誰が誘った！ この変態っ！」

アタシの空のように広い心でも、無理矢理ファーストキスを奪われた恨みは晴れることはないのです。更にこんな形でキスまでされれば！

怒鳴って、寢床であるソファーに向かいます。

くつくつと、ご主人様の笑い声が聞こえます。
振り返る気力すらありません。にやにやと、変態な笑みを浮かべているに違いないんですから！

「みー、シェリテのフルーツタルトは？」

……む、無視です、無視！
食べたいなどと考えるはいけないのです！

「乾、みーの分は夕食のデザートに出してあげて」

「かしこまりました」

さっきちらりと見た美味しそうなフルーツタルトを思い浮かべながら、アタシは眠りにつくのです。

聞こえたご主人様と乾さんの会話が、ほんのちよつと嬉しかったのは……内緒です。

猫とベッド（前書き）

短編より移行。

「10、色々とされました。」と「11、真相が判明しました。」
の間の出来事。

猫とベッド

昼間たくさん寝ていても、夜になれば自然と眠気は襲ってくるものなのです。

あくびをしつつ、寝支度を終えベッドに向かいます。

「遅かったね、みー」

そこにはなぜか、既にご主人様がいました。思わず立ちどまり、理由が理解出来なくて首を傾げます。

そこはアタシのベッドなはずです。

「みー」

自分の隣をぼんぼんと叩きながら、ご主人様は笑顔で再度アタシを呼びます。

ああ、あの笑顔をする時は逆らわないのが一番なのです。恐る恐るベッドに近付いて乗っかって、ご主人様を見つめます。

「なんで俺がここにいるか分かってないって顔してるね。昼間自分が何をしたか、思い出してみたらどう？」

……昼間、ですか？

昼間は確か、ご主人様が外出されたのでお屋敷の中を探検したのです。

無駄に立派なお屋敷の中は、やっぱり無駄に豪華だったのです。

で、その途中で熊さんに会いました。

大きな身体におひげのお顔、つぶらな瞳はお歌の中の熊さんそのものだったのです！

あるう日い、森のお中あ、熊さんにい、でああった。……出会ったのはお屋敷の中でした。

とにかく、アタシは熊さんにくっついて厨房にいつて、そこでアイスをいただいたのです。甘くっておいしかったのです。ほっぺた落ちるかと思いました。

そんなアタシに、内緒だよともうひとつアイスをくださいまして、探検のお供にアイスが増えたのです。

「みー、思い出した？」

そこまで思い出したところでご主人様から声がかかりました。が、無視です。

アタシの小さな脳みそでは一度にたくさんのことを処理できないのですよ。

ええっと、アイスをお供に探検を再開したのですよ。
それでとっても素敵なベッドを発見しまして、そこで昼寝をして
しまったのです。

当然起きた時にはアイスは姿を消しておりまして、ふにやふにや
になったコーンだけがアタシの手元にあったのです。
ミステリーですね。

うんうんと頷くアタシとは対象的に、ご主人様はどこかイライラ
した様子です。

ダメですよ、カルシウム不足は身体と心に悪いのです。

「シーツだけでなく、マットレスまでクリーニングする必要がある
んだって」

……ナンノコトデショウ。

「あのベッドはサイズが特注な上に俺の身体に硬さも合わせてある
んだよね。」

新調するよりはクリーニングの方が早いし安くつくということに
なったんだけど……」

嫌な予感がして、ベッドの上で後退ります。ですがすぐにつかま
れ、それも阻まれました。

ご主人様、あなたは人でなしですか。

こないたいけなアタシをいじめるだなんて。

「一週間」

はい？

「ベッドが使えるようになるまでにかかる期間。
その間俺はこのベッドで休むことにするね」

もつと意味がわからないです！
というか、手を離してくださいっ！

「暴れるな、みー」

それは無理な相談ですっ！

だけど抵抗は無駄で、アタシはご主人様の腕の中にすっぽり収まります。

のしかかるような格好はご主事様の体温を直に感じれて、トクトクと伝わる心音が眠りを誘うのです。

……………。

はっ。ついうとうとしてしまいました。

アタシとしたことが！

「睡眠はしっかりしたものを短くというのが、うちの祖父の格言ですね」

はあ、ご主人様のお祖父様の格言ですか。
確かに素敵な眠りは最高なのです。それはわかります。

ですがですね、それがアタシと一緒に寝ることにつながるのか理解出来ませんよ！

「だから合わないベッドで休む気にはなれない。客用で一番俺に合うのがこのベッドなんだよね」

だったらアタシが別のところで休むですよ！ アタシはどこでも寝れるのが特技なんです！

「とはいえ、普段使っているベッドには到底敵わない。そこで思いついたのが、小動物ぺっとによる癒し効果。

そういう訳だから、俺のベッドを使い物にならなくした罰として大人しく抱き枕になって」

んなつ！ なんと横暴な！

アタシは小動物は小動物でも、大人しく主人に従う？犬？ではな

く？猫？なのです！

それを主張するためにご主人様の顔を睨みつけたら 寝息をた
てて寝てやがります。

アタシもびっくりな寝つきの良さですよ。

「……………今日だけ、だから……………」

ベッドをダメにしたのはアタシなのです。なので今日は引いてあ
げるのです。

決して、ご主人様の温もりが心地よいとか、そんな理由じゃない
のですとも！ ええ！

ご主人様の肩に頭を預ける体勢で、そのままアタシは眠りにつき
ます。

木々に囲まれたこのお屋敷は夏の夜でも涼しくて、くっついて寝
ても暑苦しくないのが救いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5269s/>

ご主人様と猫。

2011年8月8日16時15分発行